

地域研究コンソーシアム賞

地域研究コンソーシアム (JCAS) は、その規約において「国家や地域を横断する学際的な地域研究を推進するとともに、その基盤としての地域研究関連諸組織を連携する研究実施・支援体制を構築することを目的とする。これにより、人文・社会科学系および自然科学系の諸学問を統合する新たな知の営みとしての地域研究のさらなる進展を図る」と述べ、それに続いて(1)共同研究の企画・実施・支援、(2)海外研究拠点の設置運営と国際的な共同研究・臨地研究の企画・実施、(3)研究成果の国内外への発信・出版、(4)地域研究情報の相互活用・共有化と公開という具体的目標を掲げています。

地域研究コンソーシアム賞は、上記の目標を達成する上で大きな貢献のあった研究業績ならびに社会連携活動を広く顕彰することを目的として授与されます。

第11回(2021年度)地域研究コンソーシアム賞 審査結果および講評

第11回(2021年度)地域研究コンソーシアム賞(JCAS賞)の授賞対象作品ならびに授賞対象活動について下記の通り、審査結果を発表します。

地域研究コンソーシアム賞の研究作品賞は、地域や国境、そして学問領域などの既存の枠を越える研究成果を対象とするもので、作品の完成度を評価基準としています。登竜賞も研究作品賞と同様の趣旨ですが、研究経歴の比較的短い方を対象としていますので、作品の完成度に加えて斬新な指向性や豊かなアイデアを重視して評価しました。研究企画賞は共同研究企画の活動実績、また社会連携賞は教育・人材育成のための連携・協力をはじめ、狭義の学術研究の枠を越えた社会との連携活動実績を対象としています。

審査については、運営委員会が担う一次審査によって審査対象作品および活動を絞り込み、専門委員から、一次審査で絞り込んだ作品あるいは活動に対する評価を書面で回答していただきました。今年度の専門委員は、研究作品賞については和泉真澄氏、倉沢愛子氏、鈴木茂氏、寺田勇文氏、登竜賞については河野泰之氏、佐藤仁氏、三尾裕子氏、研究企画賞・社会連携賞については佐藤寛氏、武内進一氏、峯陽一氏にお願いしました。そして、一次審査の結果および専門委員の評価を踏まえて、地域研究コンソーシアム賞審査委員会(理事会)において最終審査を行いました。この場を借りて、審査に関わってくださった皆さま、とりわけ専門委員諸氏に篤く御礼申し上げます。

今回の募集に対して、研究作品賞候補作品14件、登竜賞候補作品22件、研究企画賞候

補活動2件、社会連携賞候補活動5件の推薦があり、一次審査によって絞り込まれ専門委員による評価の対象となった作品および活動は、研究作品賞2件、登竜賞3件、研究企画賞2件、社会連携賞2件でした。

多くの優れた作品・活動の推挙を感謝申し上げますとともに、受賞された皆さまには、委員会を代表して心からお祝いを申し上げます。

以下は、各賞の受賞理由ならびに受賞作品・活動に対する講評です。

研究
作品賞

荒 哲 著

『日本占領下のレイテ島』

(東京大学出版会、2021年2月)

アジア太平洋戦争期、フィリピンは軍民ともに最も多くの犠牲者を出した激戦地として知られている。フィリピンは1935年のコモンウェルス政府設立から10年後に米国からの独立を約束されており、日本軍の侵攻、軍政は歓迎されなかった。

本書は、日本占領期のフィリピンのなかでも、マニラから遠く離れたレイテ島という一地方社会において、日本軍の侵攻がローカルな政治と社会にどのようなインパクトを与えたかを克明に記述した労作である。対日協力、対日抵抗という単純な図式を超えて、貧困、治安の悪さ、対米思想、既得権益、政治抗争、階級闘争などが複雑に絡み合いながら、住民間の暴力が誘発されていく様子がフィリピン、米国、日本側の一次史料、関係者の聞き書きに基づき、極めてオーソドックスな手法を手堅く着実にこなす形で描き出されている。20年を超える著者の重厚な調査研究活動が紡ぎ出した迫力ある作品と言えるだろう。

なかでも特筆すべきは、民衆による対日協力問題を、同地のエリートによる対日協力と比較しながら論じた点にある。本書によれば、フィリピン革命以後、米国植民地期を経たレイテ島の社会階級状況は、都市部と異なり、エリートを単純な図式で説明できないほど複雑な様相を呈していた。マニラの中央政治と直結し、地方政治を掌握していた州トップの政治家とはまったく異なる階級的地位にあった町村レベルの指導者が日本占領時代を期して、抗日ゲリラのリーダー、あるいは対日協力の首長として権力を掌握し、階級上昇した例も顕著に見られたと言う。

そこで本書では、中央政界とのつながりを持つナショナルなレベルのエリート、レイテ島の地方エリート、さらに下位中間層以下の住民をそれぞれのアクターとして捉えたうえで、戦前期のレイテ島の政治社会状況、階級階層間の利害対立が日本占領期における各アクターの複雑な動きに結びついていたことを、社会史的な記述により論じている。巻末には本書に登場する人名が200件ほど挙げられており、その多くがレイテ島内の関係者である。戦時下という特異な時期の対日協力者、抗日ゲリラなど、人びとの動向を具体的かつ克明に検討している点で、日本占領期研究のみならず、フィリピン地方史研究においても

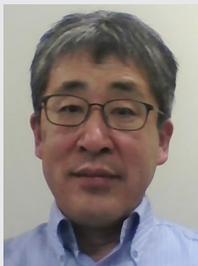
画期的な業績として高く評価されるべきであろう。

さらに、民衆による対日協力は表層的には日和見主義的な動機によるものだったとしても、レイテ島の非対称的な社会状況において、経済的な貧困に苦しむ社会的地位の低い住民の心情がそこに見え隠れすることも指摘されている。こうした視点はこれまで、フィリピンの対日協力問題では見過ごされがちであった。とりわけマニラ以外の地方社会における実態はほとんど解明されておらず、そうした点でも本書は、特定の地域、地方社会をその内部から理解しようとするフィリピン地域研究に大きく貢献するものとして高く評価できる。

以上の点から、本書は地域研究コンソーシアム研究作品賞に値する。

●受賞者プロフィール

荒 哲 (あら さとし)



福島大学基盤教育非常勤講師。フィリピン大学大学院フィリピン研究学博士課程修了 (Ph.D in Philippine Studies)。専攻は国際関係論、フィリピン近現代史。文部省 (現文部科学省) アジア諸国派遣留学生としてフィリピンに滞在。元フィリピン・デラサール大学教養部歴史学科准教授としてフィリピン史、日比関係史を教え、日本占領下フィリピン社会の変容に関する論考を多数刊行する。現在はアジア史関連をテーマとした英語科目を教えつつ、民衆史の視点からの日本占領下フィリピンに関する研究を続けている。

登壇賞

村橋 勲 著

『南スーダンの独立・内戦・難民——希望と絶望のあいだ』

(昭和堂、2021年2月)

地域紛争の様態や人びとの希求する生が大きく変化しつつある現代社会において、地域社会のひずみが顕在化する難民をめぐる研究は、地域研究における中心課題と言っても過言ではない。アフリカでは、2013年末に内戦状態に陥った南スーダンで、国民の3分の1が故郷を追われた。また、南スーダン難民の流入を受けてアフリカ最大の難民受け入れ国となったウガンダでは、新たな難民支援計画が導入され、その支援モデルは国際社会や国連機関の注目を集めることになって行く。

本書は、2013年から2018年にかけて著者が南スーダンとウガンダで実施したフィールドワークで取得した緻密な現地データに基づき、当事者の視点から、南スーダンの人道危機、ウガンダにおける南スーダン難民支援、南スーダン難民の生活実践・生活戦略について詳細かつ多角的に考察した良質な民族誌である。現地調査に基づくミクロ分析、史料に基づくマクロ政治分析を組み合わせ、「エスニック化」する難民コミュニティの問題、「自立」を目指す人道主義のあり方の限界といった問題を再考しており、人道主義のアップ

データにも寄与する第一級の研究書と言える。

そこではまず、南スーダンとウガンダの国境地帯を人びとが頻りに行き来してきた歴史が確認され、次いで第二次スーダン内戦後から新たな紛争へと至る南スーダンの政治社会的文脈、また紛争下における難民それぞれの越境の動機や願望が明らかにされる。さらに、国際的にみて人道支援の言説や枠組みが従来の「管理とケア」型から「自立とレジリエンス」型の支援へと移行するなかで、難民たちが出身地とのネットワークを利用しつつ、難民居住区を含む受け入れ社会の多様なアクターとの間に市場志向的な社会経済活動を主体的に生み出すことで、受け入れ国の経済にも影響を及ぼしているさまが具体的に明らかにされた。

このようにして本書は、紛争下で国境を越える人々の移動が、紛争による強制的な故郷喪失という側面だけでなく、新たな生活機会を希求する自発的越境という側面も持っていたこと、また、人道支援の言説や枠組みの変化は、人々の生計活動をより市場志向的なものとし、難民居住地だけでなく難民受け入れ地域にも一定の経済的効果をもたらし得る一方、人々の経済活動はより市場化・個人化する傾向にあり、難民受け入れ地域の人口急増とともに、格差の拡大を生み出すリスクがあることを指摘するが、その分析と考察は見事と言うより他はなく、地域を超えた難民研究に比較の視座を提供し得る著作として高く評価される。

難民問題を検討する上で考慮すべき観点が余すところなく検討されているばかりか、議論もよく整理され、平易な記述と相俟って、アフリカ研究や難民研究にとどまらない射程を有する作品と言える。地域横断性、学際性、現実社会の課題に対する応答性のいずれにおいても水準が高く、地域研究の質的向上に貢献する意欲的で優れた著作と評価することができよう。

以上の点から、本書は地域研究コンソーシアム登竜賞に値する。

●受賞者プロフィール

村橋 勲（むらはし いさお）



東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター特任研究員。専門は文化人類学、アフリカ地域研究。京都大学総合人間学部卒業、京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程修了後、NHKカメラマン。大阪大学大学院人間科学研究科博士課程に入学後、南スーダンの紛争と難民に関する研究を行い、2019年に博士号（人間科学）を取得。同志社大学非常勤講師、日本学術振興会特別研究員PDを経て、2020年より現職。紛争下でのヒトの移動、グローバルな人道支援、難民の生活戦略などについて調査を進めている。また、南スーダンのナイル系農牧民の政治体系に関する民族誌的研究や、映像アーカイブを活用したフィールドワークなどにも取り組んでいる。

***New Asian Approaches to Africa:
Rivalries and Collaborations,***
Wilmington: Vernon Press

本書は、経済発展にともなって21世紀の国際社会における存在感を急速に高めつつあるアジア諸国とアフリカ諸国との変わりゆく関係に着目し、アフリカ諸国に対するアジア4か国の関与の変化について、日本・中国・インド・韓国を代表するアフリカ地域研究者とアフリカ(南アフリカ)のアジア地域研究者とが行った国際的な共同研究の成果である。

そこではまず、日・中・印・韓4か国のアフリカ諸国に対する外交的アプローチについて、各国が主催してきたアフリカフォーラム(TICAD、FOCAC、IAFS、KAF)に焦点を当てた政策分析が行われ、次いで外交・政治・援助以外の観点として、日本・中国・韓国からアフリカ諸国への文化的なアプローチが考察される。さらに近年注目される事例として、ビジネスと援助の連携や開発援助の国際的なレジームの変化を取り上げるなど、本書の最大の特徴は、日本を含むアジアとアフリカの関係を援助や外交に限定せず、文化交流やビジネスの側面も含め、多角的・相互連関的に理解しようと試みた点にあると言えるだろう。

個々の論文における記述の精粗は否定できず、アフリカ側の対応に関する分析についても物足りなさが残るものの、アフリカの開発・発展に関するアジア側の理解を整理すると同時に、アフリカの側から見たアジアからの開発支援の姿を点描した良書であり、優れた研究企画と評価できる。近年、アジアとアフリカのつながりがかつてのヨーロッパ経由のルートから政治・経済・文化など、多様な直接的ルートに移行している流れを踏まえ、アジア・アフリカの研究者ネットワークを活用した本研究企画が立てられたことは時宜にかなっており、今後の地域研究の広がりにも貢献するものと考えられる。さらにアジア諸国のアフリカ研究者を集めて一冊の本をつくらうという企画力を存分に発揮する形で、米国の出版社から英文で成果を公表するに至ったことは、今後のこの分野の研究の基礎を提供したという意味で大きな貢献と評価されよう。共同研究者の世代も各国の第一人者から30代の若手まで幅広く、それぞれの専門分野も文化人類学、歴史学、経済学、政治学、国際関係論、援助研究等々、多様なうえに、執筆者10名のうち6名を女性研究者が占めるなど、国際性と学際性、多様性に富んだ研究企画となっている。

このように本書は、国籍、世代、学問領域、研究地域において極めて多様な共同研究者が、それぞれ異なる視点・アプローチから「変動激しいアジアとアフリカの関係を描き出す」という共通の目的を持って取り組んだ、地域研究の展開の好事例として、研究企画賞に値すると評価できる。

●受賞者プロフィール

岩田 拓夫 (いわた たくお)



立命館大学国際関係学部教授。専門は比較政治、アフリカ政治研究。神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程修了。博士(政治学)。主にアフリカ政治(民主化、地方分権化、国境、下からの政治、笑いと政治、自治体間国際協力)やアフリカの国際関係(近年は、アジアとアフリカの地域間の国際関係)について研究を続けてきた。

本プロジェクトは、アフリカで長期現地調査の経験を有する地域研究者が中心となって2004年に設立され、学術的視点に基づいて現地での支援活動と日本での情報発信をおこなってきた会員約60名のNPOが継続的に取り組んでいる3つのアフリカ支援プロジェクトのひとつである。

コンゴ民主共和国の森林地域に暮らす人々は、紛争による交通インフラの崩壊により生活の困窮を余儀なくされていることから、本プロジェクトでは河川の交通に着目し、森林地域の村の地域産品を船で都市まで輸送することを支援した。輸送手段を提供することによって経済活動を活性化するだけでなく、プロジェクトへの参加を通じた地域住民の人材育成や、外部者もふくむ関係者同士の協力体制強化を目指すものであり、地域住民との協働による開発実践として意義深い取り組みと言えるだろう。また、1回の商品輸送支援で終わるのではなく、継続的な取り組みとして実施されている点にも本プロジェクトの特徴がある。マイナス面も含め、プロジェクトが地域社会に与えた影響を検証しようとする姿勢、また過剰な資源利用を抑えた持続的な資源管理システムの構築を目指している点も重要である。

途上国社会を対象とする地域研究者が行きがかり上、開発支援実践に関与しなければならなくなる事例は少なくないが、そうした場合に地域研究者はこれまで、「研究者」と「支援者」の立場を切り離して自分を納得させることが多かった。しかしながら近年では、開発実践自体を研究対象の中に組み入れる「プロジェクトエスノグラフィー」的なアプローチを積極的に取ることも行われるようになっており、本プロジェクトはそれを意図的かつ大規模に実践した記録と言える。地域研究の成果を実践活動に直接生かすことを志向し、実践活動を研究の一環として位置づけ、研究と実践の統合を図った意欲的な取り組みである。プロジェクトの中心を担っているのが若手研究者であること、また、これから息の長い連携になるであろうことを予感させる点も、高く評価したい。

なお、日本社会に対する働きかけという点では、本プロジェクトの内容を広く一般に伝える目的で、2018年1月から約1年にわたってNPOのウェブサイトで連載されたレポートに基づく書籍『コンゴ・森と河をつなぐ 人類学者と地域住民がめざす開発と保全の両立』が明石書店から2020年3月に刊行されている。入念な編集作業の結果、同書には現地住民の日々の暮らしから価値観までが軽妙な筆致で表現されており、広く一般に向けて調査地の特色や魅力を伝える優れたルポルタージュであると同時に、地域研究の根本に自然と生態の研究があることを再認識させる良書と言えるだろう。

以上の点から、本プロジェクトは社会連携賞に値する。

●受賞者プロフィール

NPO 法人アフリック・アフリカ代表理事 松浦 直毅（まつうら なおき）



静岡県立大学国際関係学部助教。博士（理学）。専門は人類学、アフリカ地域研究。京都大学大学院理学研究科博士課程修了。日本学術振興会特別研究員 PD を経て 2012 年より現職。NPO 法人アフリック・アフリカ代表理事、NPO 法人ビーリア（ポノボ）保護支援会理事も務める。アフリカ熱帯林地域において人類学的研究に取り組むとともに、保全と開発にかかわる実践活動をおこなっている。おもな著作に、『現代の「森の民」：中部アフリカ、バボンゴ・ピグミーの民族誌』（昭和堂、2012 年）、『コンゴ・森と河をつなぐ：人類学者と地域住民がめざす開発と保全の両立』（共編著、明石書店、2020 年）がある。

2021年10月30日

地域研究コンソーシアム賞審査委員会